

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和7年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）

- A：十分達成できている
- B：おおむね達成できている
- C：やや不十分である
- D：不十分である

| | |
|------------------|--|
| 学校名 | 佐賀市立本庄小学校 |
| 1 前年度 評価結果の概要 | <ul style="list-style-type: none"> ・全職員で授業実践と教師研究に取り組んだことで、児童の学びが高まる実践を探究する教師集団が育った。また、冊子「HONNJO COMPASS」を作成した。これを基盤に継続した実践研究を進め、児童の姿で効果を検証していきたい。 ・児童が安心して通える学校環境づくりを推進してきたが、全児童の安心までには至らなかった。児童間の「褒める」「認める」取組を模索し、児童の自己肯定感、学習意欲、向上心の高まりへと誘う活動へと充実させていきたい。 ・挨拶・掃除に重点を置いた取組は、共に高め合う本庄っ子の育成に効果が見られた。校内にとどまらない取組となるよう、地域の方や保護者を巻き込み、更なる効果を模索していきたい。 ・校内研究の在り方や行事内容の見直しで業務改善が進んでいるが、目標達成には至っていない。学校マネジメントや分掌部の取組にも見直しの視点を広げ、より効率的な働き方ができる職場づくりを模索する必要がある。 |

| | |
|----------|--------------------------------------|
| 2 学校教育目標 | 自ら学び（知）、共に高め合い（徳）、たくましく生きる（体）本庄っ子の育成 |
|----------|--------------------------------------|

| | |
|------------|--|
| 3 本年度の重点目標 | <p>本庄コミュニティスクールとして、地域・家庭との連携した教育環境を基盤にして、本校教育目標の達成に向け、重点目標を次の4点に定め、具体的な教育活動を組織的に推進する。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①「自ら学ぶ本庄っ子の育成」のため、「学び部」を組織し、「見取りと介入」に重点を置き、児童の学びに係る授業改善の実践研究と、教師の学びに係る教師研究の両面から両者の有機的、継続的な取組を追究、実践する。 ②「共に高め合う本庄っ子の育成」のため、「こころ部」を組織し、「ほめて伸ばす」に重点を置き、児童の互いに思いやる心を育てる取組を推進するとともに、全児童が安心して学校へ通える環境作りを推進する。 ③「共に高め合う本庄っ子の育成」のため、「安心部」を組織し、「挨拶・廊下歩行・スリッパ並べ」の場面に重点を置き、児童の体験的な活動を通して、児童が物事に対して自ら考え、他者の思いも尊重しながら判断、行動する自発性や自律性を伸ばす取組を推進する。 ④「たくましく生きる本庄っ子の育成」のため、「楽しみ部」を組織し、「体力」と「食生活」に重点を置き、体育科の授業や身体動かすイベントなどの取組や食育への取組を通して、運動を楽しみ、好む児童を育てるとともに、健康的でたくましい体をつくる児童を育てる。 |
|------------|--|

4 重点取組内容・成果指標 5 最終評価

| (1)共通評価項目 | | | 最終評価 | | 学校関係者評価 | | |
|---------------------------|--|---|--|-------------|--|----|---|
| 評価項目 | 重点取組 | 成果指標 (数値目標) | 具体的取組 | 達成度 (評価) | 実施結果 | 評価 | 意見や提言 |
| ●学力の向上 | ○児童を「見取り」、児童を「伸ばす」、児童に「気付かせる」を重点とした授業改善の実践研究の推進。 | ○毎月、「3分間チャレンジ」の取組を実施する。 | 「3分間チャレンジ」の取組(児童) ①標準化された問題(国語、算数の問題)を児童に3分間解説せ、結果を点数化する。 ②個々の点数をグラフ化し、児童に返す。 ③児童の伸びを児童自身に振り返らせる。 | A | 「3分間チャレンジ」の取組を年間通して実践することができた。具体的には、①通常学級の全学年において、ほぼ毎月実施し、結果を得点化することができた。②児童個々の得点は、結果としてグラフ化し、ほぼ全学年で児童に返すことができた。③返す際には、学年の実績に応じて児童一人一人に自分の伸び振り返らせ、自分の頑張りが実感できるように取り組むことができた。 ・授業改善へのつながりが見えるよう継続して実践研究を推進する必要がある。 | A | 「3分間チャレンジ」の取組について、年間を通じて継続的な取組が確実な成果を上げている。 ・児童個人個人の努力の成果を見る化することで、学習意欲が喚起され、向上につながっている。 ・より期待力を高めるために、全国との比較など、他校の児童と比較ができるテストの導入が望まれる。 |
| | ○児童を多面的・多角的に見取る時間を、学期に1回以上設ける。 | 「児童を多面的・多角的に見取る」時間(教師) ①「三層での見取り」を基準に児童の見取りを行い、伸びの推移等を関わる教職員や教科等部で確認する。 ②それぞれの層への次の手立てを考える。 ③①②のサイクルを毎学期回していく。 | ○児童を多面的・多角的に見取る時間を、学期に1回以上設ける。 | A | 「児童を多面的・多角的に見取る時間を毎学期1回以上設け、ほぼ全教師が授業実践に生かすことができた。具体的には、①②授業を持つ教師の96%が、随時「三層での見取り」の基準で見取りを行い、他の教師と協働で手立てを検討し、実践することができた。③その結果、93%の教員が、児童を「見取り」「伸ばす」「気付かせる」というサイクルを回しながら、授業改善を進めることができた。 ・授業の手立てが、より円滑で効果的な多層支援となるため、各教師の見取りの技術向上と、手立て検討の協働プロセスを見直しを推進する必要がある。 | A | ・教師の見取りの力が向上したとの評価が見られる。三層の見取りが確立され、児童の頑張りや学習意欲が向上する継続的な取組となるよう期待している。 ・先導的な研究推進を担う本校の特性もあるかと思うが、「三層の見取り」のシステムや運用が複雑に感じられる。全教師の理解や定歩みが更に揃えば大きな成果が期待できると思う。 ・学力・学習状況調査の結果にも反映されることを期待したい。 |
| ●心の教育 | ○児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動。 | ○道徳教育に関するアンケートで、肯定的評価をした教師90%以上 ○自分や友達の良さを見つける時間を各学級で実施した回数が、学期に1回以上 | ①全校的に、思いやりについて学ぶ場として人権集会・平和集会を実施する。 ②豊かな心を育む道徳科の授業づくりについて、全職員で道徳科の授業を参観し、学ぶ場を設ける。 ⑤ふれあい道徳を実施し、保護者や地域の方々へ本校の道徳教育への理解を促す。 | A | ①人権集会、平和集会に加え、多文化共生集会を全校的に開催し、思いやりや多様性について学ぶ場を設定した。また、児童の実態や学年の発達段階に応じて道徳教育を行う場を設定し、実践できた。 ②道徳科の全校授業研究会に90%の教師が参加し、研修を通じて道徳科の授業について学び、研鑽を深めることができた。 ③全学級でふれあい道徳を実施し、うち、半数は保護者や地域の方も授業に参加していただく形で実践することができた。 | A | ・道徳科授業の参観時に保護者と一緒を考えるような取組が行われていることに共感する。学校と家庭で子供を育てる支持的風土づくりに期待したい。 ・道徳科の他、思いやりを育む人権集会・平和集会が熱心に行われている。人権教室については、「こどもの権利」としての側面も育成して欲しい。 ・児童に寄り添い丁寧に対応されている様子を見かけることが多かった。 ・心の教育が一番大切だと思っている。子供たちの心をたくさん動かしてほしい。 |
| | ●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実。 | ○いじめやいじめの疑いがある行為の有無について、職員間で共通理解を行う場を、月1回以上実施 ○いじめ防止等について、組織的な対応ができている」と回答する教師90%以上 | ①いじめの定義やいじめ防止等のための取組等について、年度当初に全職員で確認する場を設ける。 ②毎月の「こころのアンケート」を実施し、いじめやいじめの疑いを早期に認知し、早期対応を図る。 ③毎学期はじめに佐賀市の「いじめゼロインボ」作戦を実施する。 ④いじめの認知、認知に関するマニュアルをもとに、問題が発生したときの即時対応を行う。 | A | ①いじめの定義や認知、対応の仕方など、5月、7月に全教師で確認する研修を行った。 ②「こころのアンケート」を毎月実施し、その結果や月1回以上開催した生徒指導委員会、教育相談委員会における情報交換において、いじめの認知、早期対応に努めた。いじめの認知件数は昨年比3.57倍となり、児童が出す小さなサインも見逃さない体制ができてきている。教師アンケートでは、97%の教師が組織的対応ができたと回答している。 | A | ・アンケート結果から、一人一人の子供を大切に取る取組がなされていることがかかえ、感謝している。 ・いじめ防止について全校で取り組まれている姿が感じられる。「いじめゼロ」に固執せず、担任や児童が訴え、報告できる(いじめの早期発見)よう取組を続けて欲しい。 ・早期発見・早期対応が一番なので、今後も多くの目で見て、感じて、継続した取組をお願いしたい。 |
| ●健康・体づくり | ○児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。 | ●先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」と肯定的な回答をした児童生徒80%以上 | ①学年、学級、委員会、クラブなど様々な集団活動の中で、児童一人一人をできるだけ多くの職員で見守り体制をつくる。 ②生徒指導協議会等で児童の情報を共有する場を月1回以上設け、個に応じて適切なほめて伸ばす指導、支援が行えるようにする。 ③個々の目標ややりたい姿を常に意識させ、活動後や学期末に振り返らせ、個々の成長を価値付けすることで、児童自身が自分の良いと実感できるようにする。 | B | 「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思うか」の児童アンケートでは、89%の児童が肯定的に回答している。「将来の夢や目標を持っているか」の児童アンケートでは、79%の児童が肯定的に回答している。目標にポイント届かなかったが、中間評価からポイント増加した。 ・年度後半から、ポジティブ行動支援として、教師が児童の頑張りや積極的行動を全校放送で称賞したり、委員会活動として児童が指示したりする取組を実施したことが、児童が即時的に自分のよさを成長を感じ、自己肯定感や次の目標、めあてにつながっている。継続的に取り組む必要がある。 | B | ・日々ちよっとした関わりや授業の取組で子供一人一人のよさを認め励ますことが大切と考える。よい取組となっている。 ・授業参観で児童の発言に丁寧に、他の児童も「あいつ」を打つ場面が多く見られた。児童の主体性や自己肯定感を伸ばすため、一人一人に応じた「ほめて伸ばす」取組がなされている。ぜひ継続してほしい。 |
| | ○児童にとって「居心地のいい学校」となるための教育活動。 | ○「友達に思いやりをもって接している」と回答した児童90%以上 ○「安心して学校に通うことができる」と回答する児童90%以上 | ①「こころのポスト」を設置し、適時、こころの状態を担任等へ伝えることができるようにすることで、児童が悩みや不安などを開示できる機会を増やし、学校生活に安心感を持てるように活用する。 ②不登校傾向の児童が学校で安心できる場として、「にこいろルーム」及び別室対応支援員を活用し、児童の心理的安全性を確保する。 ③ほめて伸ばす取組を学年の実態に合わせて学年単位で実施する。 | B | 「児童アンケート」では、「友達に思いやりをもって接しているか」の問いに、89%の児童が安心して学校に通っているかの問いに89%の肯定的回答があった。 ・不登校傾向の児童が学校で安心できる場として、「にこいろルーム」を設置し、別室対応支援員を配置し、児童の心理的安全性の確保に努めた。 ・教師アンケートでは、全教師が、各学年で、児童の実態に応じた「ほめて伸ばす」取組を工夫し、実施することができた。 | B | ・一人一人のよさが生きる学級経営、授業づくりに期待している。 ・子供は友達に認められることや集団の中で居場所のあることが最も安心することを考えると、特別活動や地域住民との活動等で、仲間意識や自分のよさをアピール場面も多かったと思われる。 ・「ポジティブ行動支援」を継続することにより児童の自主性を育む取組となることを期待する。 ・子供と同様に先生方も「安心して」学校(居場所)であってほしい。 |
| ●業務改善・教職員の働き方改革の推進 | ○合理的配慮の提供を意欲した、個に応じた指導、支援 | ○合理的配慮の提供を意欲した、個に応じた指導、支援 | ○特別支援学級の授業参観、授業研究会を設け、教師個々が専門的知識や個に応じた指導、支援について理解を深める場とする。 ②個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成等も含め、定期的に、特別支援教育に関する情報交換会を行い、配慮を要する児童の特性や合理的配慮について協議し、支援方法を全体で共有する。 | B | ・教師アンケートでは、「自分の良いところやがんばっていることが言えるか」の問いに、69%が「すぐ言える」、21%が「言えそう」と回答した。また、教師アンケートでは、97%が「身近な大人からほめてもらえるような取組」が行えていると回答した。こころ部の「ほめて伸ばす」取組や安心部の「ポジティブ行動支援」の取組の成果が見えてきている。継続的に取り組んでいなければならない。 | B | ・学校や学級のカラーを出る取組で、よい取組だと感じる。学年の発達段階を考慮しながら、継続した取組での更なる成果に期待している。 ・児童がほめてもらえる環境ができていることが素晴らしい。 ・子供たちが個性を大事にして、地域でも応援、励ましていきたい。 |
| | ○「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」 | ●健康に良い食事をしている」児童生徒80%以上 ○給食の残食平均4%以下 | ①「生活習慣チェックシート」を年2回行い、家庭に啓発する取組を行う。 ②フリ参観等で食育の授業を行う。 ③楽しみ部会を毎月開き、残食状況をデータで示し、食育の取組について話し合う。 | A | 「児童アンケート」では、94.7%の児童が「健康に良い食事をしている」と回答している。また、4月から2月までの残食率は、平均2.1%であった。いずれ目標を達成できている。 ・具体的な取組に加え、「世界の味めぐり」や「おはなし給食」といった給食メニューの工夫、給食時間にIWBを活用し、給食委員会作成の視覚的コンテントによるメニュー紹介が数値につながったと考える。 | A | ・食育はとても大事だと感じている。健康と食事との関係や学年に応じた体験学習が地域の協力を得て実施されていることに感謝している。 ・食習慣は心身の健康と結びつく重要な要素であり、家庭と連携して行われている様子が十分感じられる。 |
| ●特別支援教育の充実 | ○業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減 | ●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減 | ①毎週金曜日を定時退勤日と定め、18時までに全職員退勤を徹底する。 ②分掌事務を複数の職員でチームとして任せ、効率性の業務遂行、同僚性を発揮した業務改善を推進する。 ③年次休暇を取りやすいように、定期的な会議等を入れな放課後の時間を設ける。 ④職員会議毎に、時間外在校等時間の上限と年次取得目標について周知し、意識化を図る。 | C | ・4月から2月までの時間外在校等時間(超過勤務時間)で、上限の月45時間を遵守できた職員割合は、月平均57%であった。時間外在校等時間は、月平均39時間45分である。上限を意識した個々人、チームの取組を推進するとともに、業務の標準化を進める必要がある。 ・令和7年に年次取得14日以上を達成した職員の割合は、中間評価から21ポイント上昇し、34%であった。取得日数の平均は、13.6日であった。職員個々へ年間を通した取得計画を促す取組が必要である。 | B | ・年間を見通した業務への取り組み方が難しいと思う。学校の使命を自覚して、自身の資質向上への努力に期待したい。 ・外部からは見えにくいのが、以前の学校の実態から考えると改善されている部分も多いと思われる。他の公立校よりも多忙な面も多いと推察する。 ・次年度も定時退勤日は徹底してほしいし、行事の見直し、簡素化を進めてほしい。あとは人員増の対応が難しい。 |
| | ○特別支援教育の充実 | ○合理的配慮の提供を意欲した、個に応じた指導、支援 | ○合理的配慮の提供を意欲した、個に応じた指導、支援 | B | ・教師アンケートでは、「勤務時間内において、自身の業務に取り組める時間が増えた」と回答する教師78%となり、成果指標を上回った。会議のDX化や教師個々の時間のマネジメントの結果が少しずつ実感を伴って出てきている。随時結果を基に方策を検討し、業務改善を進めていく必要がある。 | B | ・若い先生が多い中で、よさを発揮できるように教科等部や学年での協働体制づくりに努力されている。チーム力が発揮されていると感じる。 ・会議の効率を高めるには、多忙な学校なので更なる導入・活用が望まれる。 ・タイムマネジメントの意識は向上していると思われるが、定時退勤日や行事の精選と運動した取組に必要がある。 |
| ●…具共通 ○…学校独自 ○…志と誇りを高める教育 | ○つながりの中で自分に自信をもつ児童の育成 | ○自分の良いところや頑張っているところと言える児童70%以上 | ①教師が児童の良いところや頑張っているところを認め、具体的にほめることを意識する。 ②こころ部のほめて伸ばす取組や各学級の活動の中での個々の頑張りや、家庭との連絡や地域への情報発信の中で積極的に取り上げ、校内だけでなく、家庭や地域とのつながりの中で、身近な大人からほめてもらう機会をつくる。 | B | ・児童アンケートでは、「自分の良いところやがんばっていることが言えるか」の問いに、69%が「すぐ言える」、21%が「言えそう」と回答した。また、教師アンケートでは、97%が「身近な大人からほめてもらえるような取組」が行えていると回答した。こころ部の「ほめて伸ばす」取組や安心部の「ポジティブ行動支援」の取組の成果が見えてきている。継続的に取り組んでいなければならない。 | B | ・学校や学級のカラーを出る取組で、よい取組だと感じる。学年の発達段階を考慮しながら、継続した取組での更なる成果に期待している。 ・児童がほめてもらえる環境ができていることが素晴らしい。 ・子供たちが個性を大事にして、地域でも応援、励ましていきたい。 |
| ○自発性や自律性を伸ばす教育 | ○挨拶を自分からする児童90%以上 ○廊下を静かに歩いている児童80%以上 ○トイレのスリッパを並べている児童80%以上 | ○挨拶を自分からする児童90%以上 ○廊下を静かに歩いている児童80%以上 ○トイレのスリッパを並べている児童80%以上 | ①児童会活動(生活向上委員会の挨拶運動等)や全職員のカリキュラムマネジメントによる教育活動の実施を推進する。 ②廊下を静かに歩いている児童80%以上 ○トイレのスリッパを並べている児童80%以上 ③定期的な教師の現状観察やより取組への称賛、指導を実施する。 | A | 「児童アンケート」では、92%が「自分からあいさつできている」、86%が「廊下を静かに歩いている」、84%が「トイレのスリッパを並べている」と回答し、成果指標を上回った。具体的な取組に加え、こころ部の「ほめて伸ばす」取組や安心部の「ポジティブ行動支援」の取組のほめる内容にこれらが重点的に盛り込まれ組織的な取組となり、目標が明確化していることが成果に表れている。 | A | ・「ほめて伸ばす」「ポジティブ行動支援」の取組による成果が表れていると思う。児童会が活発であるため、お互いが認め合い、褒め合いながら成長してほしい。 ・教師の働きかけから委員会活動へとつながったことで、更に自発性が出ることを期待している。学校として組織的に真剣な取組が推進されており、敬意を表する。 |

| (2)本年度重点的に取り組む独自評価項目 | | | 最終評価 | | 学校関係者評価 | | |
|----------------------|--|--|--|-------------|--|----|--|
| 評価項目 | 重点取組内容 | 成果指標 (数値目標) | 具体的取組 | 達成度 (評価) | 実施結果 | 評価 | 意見や提言 |
| ◎志と誇りを高める教育 | ○つながりの中で自分に自信をもつ児童の育成 | ○自分の良いところや頑張っているところと言える児童70%以上 | ①教師が児童の良いところや頑張っているところを認め、具体的にほめることを意識する。 ②こころ部のほめて伸ばす取組や各学級の活動の中での個々の頑張りや、家庭との連絡や地域への情報発信の中で積極的に取り上げ、校内だけでなく、家庭や地域とのつながりの中で、身近な大人からほめてもらう機会をつくる。 | B | ・児童アンケートでは、「自分の良いところやがんばっていることが言えるか」の問いに、69%が「すぐ言える」、21%が「言えそう」と回答した。また、教師アンケートでは、97%が「身近な大人からほめてもらえるような取組」が行えていると回答した。こころ部の「ほめて伸ばす」取組や安心部の「ポジティブ行動支援」の取組の成果が見えてきている。継続的に取り組んでいなければならない。 | B | ・学校や学級のカラーを出る取組で、よい取組だと感じる。学年の発達段階を考慮しながら、継続した取組での更なる成果に期待している。 ・児童がほめてもらえる環境ができていることが素晴らしい。 ・子供たちが個性を大事にして、地域でも応援、励ましていきたい。 |
| ○自発性や自律性を伸ばす教育 | ○挨拶を自分からする児童90%以上 ○廊下を静かに歩いている児童80%以上 ○トイレのスリッパを並べている児童80%以上 | ○挨拶を自分からする児童90%以上 ○廊下を静かに歩いている児童80%以上 ○トイレのスリッパを並べている児童80%以上 | ①児童会活動(生活向上委員会の挨拶運動等)や全職員のカリキュラムマネジメントによる教育活動の実施を推進する。 ②廊下を静かに歩いている児童80%以上 ○トイレのスリッパを並べている児童80%以上 ③定期的な教師の現状観察やより取組への称賛、指導を実施する。 | A | 「児童アンケート」では、92%が「自分からあいさつできている」、86%が「廊下を静かに歩いている」、84%が「トイレのスリッパを並べている」と回答し、成果指標を上回った。具体的な取組に加え、こころ部の「ほめて伸ばす」取組や安心部の「ポジティブ行動支援」の取組のほめる内容にこれらが重点的に盛り込まれ組織的な取組となり、目標が明確化していることが成果に表れている。 | A | ・「ほめて伸ばす」「ポジティブ行動支援」の取組による成果が表れていると思う。児童会が活発であるため、お互いが認め合い、褒め合いながら成長してほしい。 ・教師の働きかけから委員会活動へとつながったことで、更に自発性が出ることを期待している。学校として組織的に真剣な取組が推進されており、敬意を表する。 |

| | |
|----------------|---|
| 5 総合評価・次年度への展望 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校教育目標に示す児童の3つの姿から、教師の指導部を「学び」「こころ」「安心」「たのしみ」の四部に分け、重点目標と具体的取組を整理しつながりが見える目標を立てた。目標と取組について、全職員で共通理解を図り、随時、全児童とも確認して取り組んできたことにより、おおむね目標を達成することができた。次年度は、今年度の取組内容を継続効果と効率化などの観点で精査し、より高い成果を目指していく必要がある。 ・「自ら学び」については、教師の「見取りと介入」に重点を置き、児童の学びの質を高める授業改善の実践研究と教師の学びを深める教師研究の両面に取り組んだことにより、児童の学習意欲の向上と授業の質の高まりを生む成果を得ることができた。次年度は、児童の学習評価の妥当性、教師の協働が進む同僚性を高めることができれば、研究と修養を続ける必要がある。 ・「共に高め合い」については、児童が共に安心して通える学校環境づくりを推進できた。児童の心理的安全性を確保する取組を、全校で取り組んだ「ポジティブ行動支援」の視点で見直したことにより、児童の生活意欲、主体性の向上が確認された。次年度は、教師主導から児童主体への変化を期待し、児童の更なる自己肯定感、学習意欲、向上心の高まりへと誘う活動へと充実させていく必要がある。 ・「たくましく生きる」については、「体力」と「食生活」に重点を置き、教師主導の取組だけでなく、児童会活動内での取組へ企画・提案の場を児童にゆだねることにより、児童の自己理解や自己啓発が進む成果が見られた。次年度は、特別活動の観点から、取組が更に児童主体へ進められるよう、取組の継続とシステムを見直ししていく必要がある。 ・業務改善・教職員の働き方改革の推進については、ここ数年改善してきているが、安定的な目標達成には至っていない。業務改善を推進するだけでなく、教師個々の働き方の課題を分析し、より効率的な働き方ができる職場づくりを模索する必要がある。 |
|----------------|---|